



Title	Gallia 65号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2026, 65, p. 117-119
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104492
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

卒業論文要旨

ボリス・ヴィアンとジャズ

尾 上 柊 人

本論文は、第一章でヴィアンがジャズを受容した背景知識である、ジャズの誕生からフランスでのジャズの受容について調査し、第二章でヴィアンのジャズ受容について考察し、第三章でヴィアンの小説である『うたかたの日々』においてジャズがどのような

役割を持ち、どのように描かれているのかについて明らかにすることで、ヴィアンとジャズの関係について検討した。

第一章では、ジャズ誕生とフランスにおける受容を歴史的観点から見ていき、奴隷制や人種差別に対する「自由」と「抵抗」の象徴としてアメリカで誕生し、フランスでもナチスや親世代などさまざまな支配者層に対しての「自由」と「抵抗」の象徴として受容されたことを明らかにした。第二章では、ミュージシャンとしてのヴィアン、批評家としてのヴィアン、『お前らの墓に唾を吐いてやる』を書いたヴァーノン・サリヴァンとしてのヴィアンに注目して、ヴィアンがジャズの自由な面を重視し、黒人ジャズ・ミュージシャンのすばらしさを伝えることで人種差別に抗議していたことを明らかにし、歴史的にそうであったのと同様に、ヴィアンもジャズを「自由」と「抵抗」の象徴として捉えていたことを論じた。第三章では、『うたかたの日々』の中で、ジャズは世界を構成する要素、そ

の物語の結末を予兆させるものとして必要不可欠な要素であり、「病気」と「労働」に対する「自由」と「抵抗」の象徴としても描かれていたことを明らかにした。

これらのことから、ヴィアンはジャズを「自由」と「抵抗」の象徴として見ており、その作品の中でも同じような象徴性を持たせていたということが明らかになった。

『運命論者ジャックとその主人』における「語り手」の働きから見るディドロの人間観について

本 郷 美 琴

本論文の目的は、ディドロの小説『運命論者ジャックとその主人』においてジャックとその主人の物語を読者に語る語り手の働きを分析し、そこに表れているディドロの人間観を考察することである。

中断や脱線を繰り返し、作品の世界を故意に無秩序なものに見せる語り手のために、この小説は同時代の文学の中で特異な位置を占めている。この語り手は枠物語の構造のために物語を語る「語り手」と聞き、判断する「聞き手」という相補的な役割を兼ねており、本卒業論文ではこの二つの役割について順に分析した。

第1章では「語り手」としての特徴を検討した。運命論のもとではある行為の

動機となる人間の意志の存在が疑問に付され、人物の心理に立ち入る慣習的なフィクションの手法を無批判に用いることはできない。そこで語り手は自身が従来の小説家と異なると宣言することで、この曖昧な領域に関して断言を避けようとしていると示した。またそのために人物の心理にある行為の解釈の鍵が存在する可能性が否定されることもない。第2章では主にド・ラ・ボムレー夫人の物語に対して登場人物たちが下す一連の判断を取り上げて、語り手の「聞き手」としての働きを分析した。語り手は個人の立場に限定された様々な判断の公平性を補う立場にいる。しかし語り手もまた断言しえない仕掛けのために、他の登場人物たちの意見よりもその判断が優越することはないことを指摘した。

第3章では小説を不明瞭なものにするこの語り手の二つの働きから、個人の理解を超える人間の多様性を志向するディドロの人間観について考察した。あらゆる記述の背後には作者という個人が存在し、全ての物事はその選別を受けることになる。しかしディドロにとって限定された個人の判断とは、哲学者や並外れた人物を一時の価値観で排除しかねないものである。そこで一貫性を標榜して出来事を操作するフィクションの手法をあえて明示し、判断を留保する語り手の導入によって、個人の立場をできるだけ離れた作品世界を作り出そうとしたのではないかと考える。そこにおいてこそ、矛盾を抱えた運命論者も魅力的な並外れた人物たちも包括される。

ル・クレジオ作品における子供の神秘性—『モンドほか子供たちの物語』を中心に

村 木 伸之輔

本論文ではル・クレジオ作品における子供の登場人物が持つ神秘性について、『モンドほか子供たちの物語』の読解を中心に明らかにした。作中の子供から神のような印象を受けることに疑問を感じたため、その理由を明らかにすることが目的である。

第一章第一節では各短編において子供がどのような性格上の特徴を持つのかをテキストから抽出し明らかにした。第二節ではその共通点として、「よそ者」であること、両親が不在であること、風貌が西洋的ではないこと、名前や眼差しが神秘的であること、音楽を好むこと、沈黙を好むこと、優しさを好み持っているということ、自然を愛しているということを挙げ、分析した。

第二章では第一章の結果をもとに、自然と子供について考察した。子供たちがどのように自然と一体化するのかを確認した結果、優しさや沈黙、音楽などの要素が重要であると判明した。またその様子から神秘性が感じられるということも分かった。

第三章第一節では第二章の結果を踏まえて自然との一体化こそが神秘性の原因であるとし、ル・クレジオの宗教観や自然観を分析した。その際彼のエッセーや対談記事等を参照した。結果として彼が「アニミズム」的な宇宙観を持っているということ、その点で日本にも強い関心があるということが分かった。第二節で

はなぜ自然との一体化が子供に見られ、神のように思えるのかを考察した。結果、作家が子供の純粹さや無垢さ、肉体の不完全性、雄弁ではないことが大人と正反対の位置の存在であり、自然の声を聴き調和するために適しているということ、大人をも導く力が宿っていると考えていることを導き出した。

結論として、彼の作品における子供は、「アニミズム」によって自然との一体化が行われ、他者を導く存在となっており、その様子や自然への考え方が禪の精神に近く、日本人として神秘性を感じることが分かった。以上が子供に神秘性が託されている理由である。